

# 或るアプローチへの戸惑い——《ヘゲソの墓》をめぐる——

福部 信敏

以下の話題は古くて新しい、あるいは新しく古くアプローチに関するもので、何を今さらの感を拭えない。

美術史へのアプローチの仕方には二つの態度があるように思う。無論、一方的に片方に依存することもできないし、両者の間には無限の中間的なニュアンスが存在することも言わずもがなのことである。筆者の学問領域、ヨーロッパの古典考古学、特にギリシアのそれが対象である場合、基本的には古代の真の姿をその物的遺品を通して復元することが最大の関心事である。そして究極的には当時のギリシア人がそれにどう関わったか、ギリシア人とはいったい何か、ということになる。そしてその場合の方法論上のアプローチの仕方として、自分を空しくして当の対象に語らせることが必要かつ大切なことであると理解してきたし、今

もその考え方は基本的に何ら変わっていない。自分および現代の思想を極力排除すること。

もう一つは、逆に、現代の思想で武装し、自己の考え方を確立した上で、対象をいわば料理していくアプローチの仕方である。この方法を採れば、歴史の闇に埋没されたままになっていた対象に新しい光を投げかけたり、これまで見えなかった地平を拡大したり、これまで片隅におかれて等閑視されていた部分を中央に大きく据え置いたりすることができるといえる。いわば研究者の思想の網で対象を掬い上げるようなもので、危惧があるとすれば掬われなかつたものが逆に捨てられるままになることである。

両者のアプローチともども一長一短があり、いずれが可というのではなく、研究者の資質、時代や対象領域の相

違によつて自ずから決まつてくるものであろう。もつとも才能があつて両者を自由に駆使できるものにとつてはこんな區別はないのかもしれない。

最近、筆者の研究領域の一つである古典期のアッティカの墓碑に関して或る戸惑いを感じるアプローチがなされている。この墓碑の世界を代表する「ヘゲソの墓」(口絵、前四〇〇年頃、アテナイ国立考古美術館)に関してである。

墓碑の研究史を概観すると、墓碑製作を背後で支えていた動機に関して「私的なもの」から「公的なもの」への視点の移行という大きな変遷があるように思う。後者へ研究の関心が移つた大きな原因はおそらくジェンダー論の流行によるものであろう。そしてその内容も社会的な関心から、さらには男と女の性に関わるものまで多様である。

八枚程度の原稿ではその研究史を詳しく辿ることはできないが、「私的なもの」の動機は、墓碑上の故人の形象が専ら家族の思ひ出、遺族の心に残る記念の像として刻み出されたとするものである。Was sie waren und was sie sind「ありのまま、あるがまま」というゲーテの言葉を嚆矢に、エジプトの葬礼美術の未来展望的な動機の対立概念としてギリシアのそれを過去回顧的なものとしたE・パノフスキの学説に至るまで、今もつてその有効性をもつ古典的な考え方である。ヘゲソを彼女の過ぎ去つた現世の生活でのあ

る状況における生者の姿としてではなく、地上の過去の存在から超越した死者の姿として捉えるJ・ティンメのヘゲソ礼拝像ないし祭儀像の特異な学説も、さらにはヘゲソをハデスの花嫁とみなす考え方も、大きくみれば「私的なもの」を基盤とした範疇に属しているものと考えられる。

さて、墓碑上の形象を死者の個人的な生前の生活のニコマではなく、古典期の社会生活の一つの理想、一つのアイデアオロギーとして理解しようとする「公的なもの」へのアプローチを旨とする最も新しい論文の一つを読んだ。その著者R・E・リーダーによると、ヘゲソはアテナイの男性すなわち社会が求めた女性の理想像であつて、プロクセノスの娘、コロイボスに嫁したヘゲソという私的な一個人としてのアイデンティティーはここでは関係がないという。

ここで問題なのはアテナイの社会生活において女性にあってがわれた社会上の枠組みの中にヘゲソが正しく位置づけられているかどうかということにある。かくて化粧に余念のないヘゲソが右手に摘まみ上げている首飾り(かつては顔料で描かれていた)はプロクセノスが与え、それによつてヘゲソがコロイボス家の嫁となることができた持参金の象徴ということになる。そうした社会的「公的なもの」へのアプローチは、賛成反対はともかく、学問の重要な一方、法論として当然出てくるものであろうし、冒頭で触れた、

研究者の思想の一方的な押し付けではなく、材料はギリシア世界そのもののなかに内在しているものだと思う。

ただこうした考え方の延長上にあるのかどうかはともかく、これをあまりに押し進めていくと、何とも戸惑いを隠せない理論が展開していくことになる。ギリシアの世界は確かに男社会であることに相違ない。筆者は、まさにそういう社会であるからこそ、墓碑の墓主たる女性があれほど美しく、家族愛に包まれて、しかも圧倒的な作品数で描き出されていることに注目し、それらを男社会の反証としなければならぬと教えられてきた者である。それゆえ、いわば「女性上位」に表現されたギリシアの墓碑の女性たちは、現実では実行されなかった女性に対する男性のいたわりの償い、女性が死んだ後の男社会の償い、男性の女性に対するうしろめたさの裏返しというアイロニーともとれる一つの考え方もアイロニーとして理解できない。

A・スチュワートはアメリカを代表する現代のギリシア美術史学界の碩学である。したがって、古典考古学百年の研究の成果と膨大な学的裏付けとをもつて語っているであろうから、筆者の理解の仕方が部分的であることは否めないが、ただ参照した文献の《ヘゲソの墓》に言及している数ページを熟読してみると、透き通った衣の両義性（隠すと同時に見せること）を介してのヘゲソとコロイボスとの

性的関係の持続、妻が死んだ後も夫の想像上の欲望の対象として存続し続けることが墓碑および美しいヘゲソ像製作の目的であったと言っているようにみえる。スチュワートは同じ箇所《ヘゲソの墓》と同時代の豊麗様式の傑作であるアクロポリスのニケ神殿の欄干の浮彫彫刻、まさに薄物をまとった《サンダルの紐を解くニケ像》の下腹部の深い襷に女性の陰部そのものを認めたりしているし、当時の彫刻の衣の襷一般を説明するに際してS・ド・ボーヴォワールの『第二の性』を援用しながら、「ファロス・鋤」と「女性・畝」の理論を展開している。

悠揚せまらざるヘゲソの姿と流れるように美しい衣の襷の表現に典雅なバルテノン芸術の残照を認めた美術史の時代は終わってしまったのであろうか。ヘゲソの衣の襷がバルテノン神殿西破風の《三女神》の様式上の当然の帰結と理解するような、様式そのものの純粹な内在的發展という美術史がもつていた独自のアプローチの仕方は、すくなくともここで論及してきた世界では、希薄になってしまったといわざるを得ない。女性の肉を連想させるといって、薄く濡れたような、深い襷が豊麗様式時代（前五世紀末）という特定された一時代の男社会の欲望の産物であるという考え方は、様式そのものが内包している發展ないし展開の可能性を否定してしまうのではないかと筆者は思うのである。

る。こうした戸惑いを解消するにはもう少しそれぞれの研究者の言わんとするところを深く読み込む以外にない。A・ステュワートの著作についてのN・B・カンペンの書評があることを或る友人が教えてくれた。そこでは直接《ヘゲンの墓》への言及はないし、そればかりか書評全体がなにを云いたいのか少なくとも著者には理解し難いが、「この書物は著者に賛同しつつ、かつ著者に異論を唱えつつ創造的に考える機会を与えてくれる」ものであり、「he has also used contemporary theory in ways that are productive for the future.」要するに、「過去のための、過去を指向した方法論ではなからう。」。

【参考文献】

- E.Panofsky: Tomb sculpture : Four lectures on its changing aspects from ancient Egypt to Bernini, 1964
- J.Thimme: Die Stele der Hegeso als Zeugnis des Athenischen Grabkultes, Antike Kunst, 1964, 16-28
- R.E.Leader: In death not divided : Gender, family, and state on classical Athenian grave stelae, AJA 1997, 683-99
- A.Stewart: Art, desire and the body in ancient Greece, 1997
- N.B.Kampen: AJA1998, 438-9

\*